

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：34510

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00155

研究課題名（和文）もう一つの日本近代音楽史～大正・昭和初期の女性音楽家の創造的演奏活動を再評価する

研究課題名（英文）Another History of Modern Japanese Music: Reevaluating the Creative Performing Activities of Female Musicians in the Taisho and Early Showa Periods

研究代表者

津上 智実 (TSUGAMI, Motomi)

神戸女学院大学・音楽学部・教授

研究者番号：20212053

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代日本における洋楽ジャンルの成立と楽界に対する演奏家の貢献を再評価することを目的とし、中でも女性音楽家の創造的な演奏活動が果たした役割を解明することを目指してきた。具体的には1925年から1941年まで「邦語歌唱運動」を展開したソプラノ歌手永井郁子（1893-1983）の演奏活動の実態とその音楽的・社会的意義との解明に注力し、中央紙や音楽雑誌を始め、各地方新聞に加えて、当時日本が領有していた台湾や朝鮮の新聞まで、事前の予想をはるかに上回る広範な調査を要する結果となった。そこから、日本歌曲の成立を促した活動の実態と意義とを浮き彫りにすることができたのが本研究の成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来の大きな音楽史が演奏家よりも作曲家、女性音楽家よりも男性音楽家を中心に記述されてきたことに対するアンチテーゼとして、もう一つの日本近代音楽史を構築する一つの階段となることを目指し、具体的な事例として邦語歌唱運動（1926-1941）を日本全国津々浦々で実施して社会的反響を呼んだソプラノ歌手永井郁子の活動実態を明らかにした。中でも訳詞者の堀内敬三や邦楽家の宮城道雄らとの協働を、またレート化粧品本舗平尾賛平商店のバックアップで全国展開した先駆的な冠コンサートの実態を解明することによって、日本の近代化の中で日本語による芸術歌曲が成立・発展した一つの系譜を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research was to clarify the contribution performers made for establishing the western music genres in the musical world of modern Japan. The focus was on the creative performing activities by female musicians, especially the soprano singer, NAGAI Ikuko (1893-1983). She inaugurated the "Singing in Japanese Movement" in 1925 to show the appropriateness of the Japanese language for the words in the art song. She sought to encourage new compositions of artistic song in Japanese. Her performing activities ranged all over Japan and continued to 1941 in no fewer than thousand recitals. The facts of her performing activities, her collaboration with translators, traditional Japanese musicians, and sponsors, and their influences on the society have been reported in ten separate papers, three international conference presentations, and two chapters in a book in English to be published in January 2023.

研究分野：音楽学

キーワード：邦語歌唱運動 原語歌唱 永井郁子 宮城道雄 堀内敬三 芸術歌曲 日本歌曲

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景として、日本近代音楽史研究の高まりがある。中村理平、塚原康子両氏の研究を嚆矢として、この分野の研究が盛んに行われるようになった。本研究もその流れを汲むものであり、これまで継続的に積み上げて来たピアニスト小倉末子(1891-1944)研究を踏まえて、荻野綾子(1898-1944)と永井郁子(1893-1983)という同世代の2人の声楽家の音楽活動とその意義を精査・勘案することによって、大正・昭和初期における女性音楽家たちの創造的な演奏活動が洋楽ジャンルの成立と楽界に対して成した貢献を、社会的影響を重視しつつ、一つの群像として描き出すことを目指した。

中でもソプラノの永井郁子は、戦後の音楽事典では立項もされず、ほとんど忘れ去られている。唯一の先行研究(後藤暢子「永井郁子編著『転機』解題：戦前の邦訳歌詞問題をめぐって」国立音楽大学『研究紀要』第35巻、2000年、250-254)も音楽批評に力点があり、永井の活動そのものは論じていない。しかるに共同研究(課題番号:15K02117、代表は京都市立芸術大学伝統音楽研究センター長であった時田アリソン氏)を進める中で、永井郁子の「邦語歌唱運動」の存在の大きさに気づいた。永井郁子の15年間に及ぶ邦語歌唱運動は、日本語で歌うことの議論を活性化したと見えるが、先行研究がないために実態が分からず、これを再評価する必要性を痛感したのが、本研究に着手した学術的背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近代日本における洋楽ジャンルの成立と楽界に対する演奏家の貢献を再評価することである。中でも女性音楽家たちの創造的な演奏活動が「歴史的演奏会」と「日本歌曲」の成立に果たした役割を明らかにすることを目指した。具体的には1890年代生まれの3人の音楽家、すなわちピアニストの小倉末子(1891-1944)、声楽家の荻野綾子(1898-1944)と永井郁子(1893-1983)の3人に絞り込んで、演奏活動の実態とその音楽的・社会的意義とを解明するのが当初の目的であった。

本研究課題の核心をなす学術的「問い」は、作品と作曲家を中心とする従来の音楽史が取り零してきた存在を救済する方法は何か、演奏家という音楽において欠くべからざる存在について、正しい歴史的な定位を行う可能性はどこにあるのかという問題であった。

3. 研究の方法

研究方法は文献調査と史料調査を主とし、当時の新聞雑誌における報道記事や評論に加えて、女性雑誌や女性運動機関誌等の記事、演奏会プログラムや楽譜・歌詞パンフレット、録音レコード等の史料、関連図書類についても調査・分析を行った。

新聞調査では、主要紙(朝日、読売)についてはデータベースを活用し(成果は下記の雑誌論文:2&4)、日本占領時代の朝鮮と台湾の新聞についてもデータベースを活用す

ることができた（雑誌論文：3、5 & 6）。データベース化されていない日刊紙や地方新聞については、夏期休業中に国立国会図書館に日参して、永井が1932年に出したパンフレット（永井郁子『いばらの道:邦語歌唱十六講』東京：噴泉堂）巻末の執筆一覧を手掛かりに調査した。国立国会図書館に収められていない地方新聞（南信新聞、南信日日新聞、北信毎日新聞、釧路新聞等）については、各所蔵館を回って記事を収集することとなった。

永井郁子については演奏会プログラムや録音レコード等も収集することができた。しかるに、本来の研究対象の一人であった荻野綾子（結婚後の戸籍名は太田綾子）については、東京芸術大学附属図書館に寄贈された貴重な手稿譜を含むコレクション「太田文庫 元東京音楽学校教授太田太郎氏及び声楽家太田綾子氏 旧蔵資料」の調査が重要であったが、新型コロナ・ウイルス感染症対策のために同館が長期に亘って学外者の利用を停止したため（2022年4月によりやく解禁）、実現が叶わなかったのが痛恨事である。

4. 研究成果

（1）邦語歌唱運動の規模：期間および地域

ソプラノ歌手永井郁子が展開した邦語歌唱運動は、1926年の開始から1941年の終結までの15年間に亘り、その間に1000回に及ぶ独唱会を企図して、北は樺太から南は台湾、西は朝鮮半島から中国の上海に至る各都市で実施して、地域的にも広範に及んでおり、運動と呼ぶにふさわしい継続性と規模を備えたものであったことが明らかになった。残された記録により、第200回までは詳細に、第500回までは概要が知られ、また念願であった邦語独唱会1000回達成が1941年3月3日の引退演奏会（於：日比谷公会堂）で言明されて報道・祝福されている。その間、夥しい数の永井による運動の宣言、演奏会予告、広告、論評、インタビュー記事、意見聴取等が各種媒体に掲載された。

（2）邦語歌唱を巡る論争

明治期の洋楽導入に伴って、唱歌やポピュラー系の歌は日本語で歌われていたものの、シューベルトやヴォルフ等のドイツ・リートを始めとする西欧の芸術歌曲は外国語で歌唱すべきもの、高等芸術としての歌曲は原語の外国語で歌うのが当然という理解が当時の常識であった。背景には東京音楽学校で芸術歌曲を教えたのがいずれも外国人教師であったという構造的な問題がある。永井郁子や三浦環の師であったハンカ・ペッツォールド(1862-1937、在職1910-1924)は、ピアノはフランツ・リスト、声楽はマチルデ・マルケージに師事した優れた音楽家であったが、当然ながらその指導には外国語歌唱に匹敵する日本語歌唱の方法論が欠如していた。

それを鋭く突いて問題化したのが永井郁子であった。日本語もドイツ語やフランス語に劣らず美しい言語であり、歌うにふさわしい日本語の創作歌曲を得るためには、まずは外国の芸術歌曲の邦訳歌唱から始めるべきというのが永井の主張であった。

永井の常識破りの主張は、声楽家や批評家を巻き込んだ論争へと発展した。同門のソプラノ立松房子(1891-1992)との論争「邦訳歌詞可否論」が1925年に『萬朝報』紙で展開され、『東京日日新聞』や『國民新聞』等、各紙で取り上げられた。翌1926年には音楽雑誌

『楽星』誌上で音楽批評家の三猪末松と堀内敬三とを中心に5ヶ月に亘って論争が行われた。このように音楽家や批評家等を巻き込んだ論争が各種媒体で繰り広げられて人々の関心を惹くことで、日本語の優れた歌曲と歌唱法の必要性が広く認識される結果を生んだのは、この運動の大きな成果であったと位置づけられる。

(3) 時代の必要性：ラジオ放送と新しい聴衆

邦語歌唱運動の開始期に、歌うにふさわしい芸術歌曲の邦訳歌詞を次々と永井に提供した堀内敬三(1897-1983)は、10代半ばから継続的に訳詞を手掛け、開局直後の日本放送協会の洋楽担当者時代(1926-1931)にも訳語による番組制作に力を注ぐと共に、その必要性を様々な場で繰り返し論じた。堀内も永井も、当時の日本の楽界および勃興しつつあった「新しい聴衆」の教養と理解力とに鑑みて、邦訳歌詞から始めることが必要との理解を共有していた。父の死による永井の運動開始と、アメリカ留学から帰国した堀内の日本放送協会入りとが相前後したのも幸いして、両者の協力による邦語歌唱運動が成功裡に始動した経緯が浮き彫りとなった(雑誌論文：9)。

(4) 邦楽家との協働：とりわけ宮城道雄

日本語を新たな歌曲として歌う可能性を求めて、永井は進取の気性に富む伝統邦楽の音楽家たち、箏曲家の宮城道雄(1894-1956)や三味線奏者の杵屋佐吉(第4代、1884-1945)らと協働した。中でも永井が第5回独唱会(1926年11月7日、於：帝国劇場)で歌った宮城道雄作曲の新様式による歌曲〈せきれい〉(北原白秋作詞)は繰り返しアンコールされてセンセーションを巻き起こし、宮城の名を広く知らしめる結果となった。その後、永井は47道府県中32に及ぶ地域で宮城の歌曲を「新箏歌謡曲」として地元の邦楽家たちとの共演で歌唱しており、ラジオ放送と相まって、宮城作品の普及に大きく貢献した。宮城の初のラジオ出演(1927年5月12日)も永井との共演であり、宮城を「新日本音楽」の旗手としてスターダムに押し上げる力となった(雑誌論文：7)。

(5) 日本歌曲創作の奨励

永井がめざしたのは、歌うに値する優れた日本語の芸術歌曲が創作されることであった。第500回の節目の独唱会(1932年3月1日、於：日比谷公会堂)では、事前に全国の音楽家に呼びかけて自作の歌曲を募集して、全国から120曲が寄せられた。その中から永井は26人の26曲(金城栄治作詞、宮良長包作曲〈ふる里〉を含む)を選んで歌ったが、26曲中の8曲(北原白秋作詞、近衛秀麿作曲〈ちんちん千鳥〉他)は今日、全音楽譜出版『日本名歌110曲集』に収められており、日本歌曲のスタンダードなレパートリーの形成に永井の活動が寄与したことが跡付けられる。

日本で作曲活動が活発化するのには1930年代からで、新たな歌曲を求める永井の活動はその活性化を促進した一要因と位置づけられる。

(6) 社会的影響

永井が各地で行った邦語独唱会は、上記の論争やラジオ出演等の影響もあって非常に多くの聴衆を集めた。階上階下にびっしり聴衆が詰まっている会場写真が度々新聞に掲載さ

れて、社会的に大きな影響力を持ったことが知られる。しばしば中学校や高等学校の生徒たちが大挙して来聴しており、若い人々の間に日本語歌唱の魅力と可能性を広めたことは特筆される。

とりわけ 1929 年秋の一連の邦語独唱会は瞠目に値する。9 月 21 日に早稲田大学大隈会館 (2200 席)、9 月 22 日に青山会館 (1800 席)、9 月 23 日に丸の内報知講堂 (1000 席)、9 月 24 日に本所公会堂 (938 席)、9 月 25 日に横浜会館 (1800 席) と、東京と横浜の主要会場で 5 日連続で独唱会を開催している。5 日間で 8000 人近い聴衆を動員できる日本歌曲の歌い手というのは、現在の音楽界からすると考えられない。全く想定外の事態である。これはレート白粉本舗平尾賛平商店とタイアップして行った一連の演奏旅行の一部であり、9 月下旬から 10 月上旬にかけて、東京 (4 回)、横浜、大阪 (4 回)、神戸、京都の計 11 回の独唱会をほぼ連続する 12 日間で行い、その後、11 月中旬に奈良、和歌山、岡山、高松 (2 回)、松山、広島、福岡 (3 回)、熊本、大分の計 12 回の独唱会を連続する 10 日間で実施している。

化粧品会社による冠コンサートが盛んになるのは戦後の 1970 年代であり、1929 年という突出して早い時期に行われた平尾賛平商店による一連の「音楽的化粧水レートソプラ発売記念永井郁子女史邦語大独唱会」は極めて先駆的な例と位置づけられる (雑誌論文: 8)。

一方、永井は朝鮮楽旅 (1928 年から 1932 年までに 6 回) を通じて、憲政会の政治家であった永井柳太郎 (1881-1944) と交流を持ち、台湾楽旅 (1928 年から 1937 年までに 5 回) の第 3 回 (1933) は、拓務相となった永井柳太郎 (在任 1932-1934) の勧めで渡台し、多数の小学校・公学校・高等女学校・師範学校で独唱会を行なって、永井柳太郎作詞、宮良長包作曲の〈新日本建設の歌〉を歌い、かつ児童生徒に歌わせている。永井の渡台を組織したのは台湾総督府の官僚を中心とする永井郁子後援会であったことも判明した。台湾で皇民化教育が推進されるのに約半年先立って、それに資する活動を音楽家としての永井郁子が行っていることは、抗い難い時代の制約とは言え、深く受け止めなければならない (雑誌論文: 5)。

(7) 研究成果の公表

本研究の成果は、下記の雑誌論文 10 本、学会発表 4 件、英文共著への寄稿 2 章である。

新型コロナ・ウイルス感染症で渡航が難しくなる前に、国際美学会 (2019 年 7 月 24 日、於: ベオグラード大学)、国際音楽学会アジア大会 (2019 年 10 月 19 日、於: 蘇州大学音楽学院)、さらにオーストラリア音楽学会全国大会 (2019 年 12 月 6 日、於: モナシュ大学) で本研究課題に関する発表を行う機会が与えられたのは幸いであった (学会発表: 1、2、3)。

加えて、英文共著 (*The Art Song in East Asia and Australia: 1900-1950*, ed. Alison Tokita & Joys Cheung, Routledge, January 2023 出版予定) に第 2 章 (The rise of Japanese art song) と第 6 章 (Nagai Ikuko and the “Movement for Singing in Japanese”) とを寄稿した。

本研究は、大正・昭和初期における女性音楽家たちの創造的な演奏活動が洋楽ジャンルの成立と楽界に対して成した貢献を、群像として描き出すことを目指すものであり、その研究成果を広く社会に還元する機会が与えられたことを記して感謝したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 津上智実	4. 巻 68-2
2. 論文標題 永井郁子と堀内敬三：邦語歌唱運動の開始とその時代	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸女学院大学研究所『神戸女学院大学論集』	6. 最初と最後の頁 91-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18878/00005766	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 津上智実	4. 巻 36
2. 論文標題 本邦最初期の《メサイア》演奏を担った女性たち	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸女学院大学女性学インスティテュート『女性学評論』	6. 最初と最後の頁 93-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18878/00005779	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 津上智実	4. 巻 67-1
2. 論文標題 永井郁子と宮城道雄：共演の実態と意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神戸女学院大学研究所『神戸女学院大学論集』	6. 最初と最後の頁 97-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18878/00005667	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 津上智実	4. 巻 35
2. 論文標題 音楽的化粧水レートソプラと永井郁子：1929年秋の演奏旅行を考える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸女学院大学女性学インスティテュート『女性学評論』	6. 最初と最後の頁 39-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18878/00005726	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 津上智実	4. 巻 34
2. 論文標題 『京城日報』に見るソプラノ歌手永井郁子(1893-1983)の朝鮮楽旅	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神戸女学院大学女性学インスティテュート『女性学評論』	6. 最初と最後の頁 43-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18878/00005638	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 津上智実	4. 巻 66-2
2. 論文標題 『台湾日日新報』に見るソプラノ歌手永井郁子(1893-1983)の台湾楽旅	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸女学院大学研究所『神戸女学院大学論集』	6. 最初と最後の頁 95-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18878/00005624	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 津上智実	4. 巻 66-1
2. 論文標題 読売新聞データベース「ヨミダス歴史館」に見るソプラノ歌手永井郁子(1893-1983)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸女学院大学研究所『神戸女学院大学論集』	6. 最初と最後の頁 45-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津上智実	4. 巻 65-1
2. 論文標題 東京音楽学校校友会『音楽』に見る芸術歌曲の「奨励」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神戸女学院大学研究所『神戸女学院大学論集』	6. 最初と最後の頁 27-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18878/00005529	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 津上智実	4. 巻 65-2
2. 論文標題 朝日新聞データベース「聞蔵II」に見るソプラノ歌手永井郁子(1893~1983)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神戸女学院大学研究所『神戸女学院大学論集』	6. 最初と最後の頁 83-100
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.18878/00005561	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 津上智実	4. 巻 33
2. 論文標題 『釜山日報』『朝鮮新聞』『毎日申報』に見るソプラノ歌手永井郁子(1893~1983)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸女学院大学女性学インスティテュート『女性学評論』	6. 最初と最後の頁 41-68
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.18878/00005623	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件(うち招待講演 1件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 津上智実
2. 発表標題 "Movement for Singin in Japanese' (1925-1941) of NAGAI Ikuko: Gender, Femininity, Colonialism and Imperialism."
3. 学会等名 国際美学会第21回世界大会(2019-7-24、セルビア、ベオグラード市、ベオグラード大学)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 津上智実
2. 発表標題 "Nagai Ikuko's 'Movement for Singing in Japanese' (1925-1941) in Colonial Korea and Taiwan"
3. 学会等名 国際音楽学会東アジア大会(2019-10-19、中国、蘇州市、蘇州大学)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 津上智実
2. 発表標題 “ The development of Japanese art song: NAGAI Ikuko 's “ Movement for Singing in Japanese ” (1925-1941) and her collaboration with MIYAGI Michio. ”
3. 学会等名 オーストラリア音楽学会大会 (2019-12-6、オーストラリア、メルボルン市、モナシュ大学) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 津上智実
2. 発表標題 ヘンデルのオラトリオ《メサイア》の日本初演：その実態と背景
3. 学会等名 日本音楽学会第72回全国大会 (2021-11-14、信州大学人文学部)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 TSUGAMI Motomi, ed. Alison Tokita & Joys Cheung	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 undetermined
3. 書名 The Art Song in East Asia and Australia: 1900-1950	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関